

第 65 回学術大会パネル発表報告

内陸アジアにおける法華經の展開

代表 望月海慧（身延山大学教授）

問題提起

東アジア仏教に大きな影響を与えた『法華經』は、多くのサンスクリット写本が発見されていることから、インドにおいても広く受容されていたことが分かる。これらの写本資料や漢文の法華經注釈書などにより、これまで多くの法華經研究がなされている。しかしながら、いずれもがインド仏教的視点、中国仏教的視点でなされており、両者を繋ぐ視点を欠くものである。そのような視点を批判的に考察して、辛嶋静志はサンスクリット写本が漢訳・チベット語訳されていく過程を言語学的に検証してきた。本パネルは、インドと中国の間に在るはずであるミッシング・リンクに焦点をあて、『法華經』がどのようにインドから内陸アジアを経て中国に伝わり、また中国から内陸アジアに展開したのかを解明することを目的とする。

1. 大乘仏典の成立——方等經と大衆部——

辛嶋静志（創価大学国際仏教学高等研究所教授）は、「大乘仏典の成立——方等經典と大衆部——」と題して発表。經錄と漢訳・梵語写本を精査すると、大乘經典名は、「遺曰」**vevulla* → 「方等」*vaitulya* → 「方広」*vaipulya* → 「大乘經」*mahā-yānasūtra* と変遷している。《法華經》も「方等經」= *mahāvaitulya* → *mahāvaipulya* と変遷。大乘經典は、本来**vevulla*, *vaitulya*, 「方等」とよばれたことが分かる。方等經典の集成である『大方等大集經』を見ると、大衆部が方等經を作ったことは明白。他方、有部は *vaitulika* を批判。《法華經》などの大乘經典は、大衆部所属の者たちが作ったテキストで、それを *vaitulya* とよんだのである。

2. コータン語『法華經綱要』と『法華論』

片山由美（日本学術振興会特別研究員）は、コータン語で著された『法華經綱要』とコータン出土の所謂カシュガル本『法華經』とヴァスバンドゥの『法華論』の比較検討を通じて、次の3点がカシュガル本にはなく『法華經綱要』と『法華論』で共通していることを指摘し、『法華經綱要』が『法華論』の影響を受けている可能性が高いことを明らかにした。3点とは、(1)『法華經綱要』の「序品」相当部分で『法華論』が「序品」の分析で用いた「七種功德成就」というタームが見られ、これが世尊によって説示されたと語られていること、(2)「方便品」相当部分で「二深甚」の言及があること、(3)「仏性」というタームが使用されていることである。

3. チベットにおける『法華經』の用法——一乗思想と観音信仰——

楨殿伴子（身延山大学東洋文化研究所研究員）は、チベットの土着文献における『法華経』の用法を考察した。具体的には、チベットの埋蔵經典（*gter ma*）である『摩尼十万語』（*Mani bka' 'bum*, 12–13 世紀）とニンマ派のゲツェ・マハーパンディタ（1761–1829）の『古タントラ全集目録』（*rNying ma rgyud 'bum dkar chag*），彼による、サキヤ・パンディタ（1182–1251）の『三戒区分』（*sDom gsum rab dbye*）の注釈書を取り上げた。前者においては、『法華経』が観音菩薩の顕密の 21 經典中に含まれ、後二者においては、一乗が金剛乗として解釈され、ニンマ派の九乗を擁護するための教証として『法華経』を用いていることを指摘した。

4. 『法華玄賛』のチベット語訳の特徴

望月海慧は、中国で著された基の『妙法蓮華経玄賛』のチベット語訳の特徴について考察した。チベット語訳には漢文を抄訳している箇所が多く見られるが、その起因をまとめると、(1) 『法華経』の漢訳と蔵訳の章の相違（「提婆品」「嘱累品」等）、(2) 依拠する『法華経』の漢訳と蔵訳の相違（偈数、欠落等）、(3) チベット未伝の文献（『大智度論』『十二門論』『十住毘婆沙論』等）、(4) 漢語による語彙解釈、(5) 中国の独自情報（『法華経』の伝播、非仏教文献）となり、典拠や根拠が不確実なところに省略が見られることが報告された。またヴァスバンドウの『法華論』への依拠は認識しており、漢文に見られない箇所では彼の名前を出していることが指摘された。

5. 西域出土法華章疏の諸相

金炳坤（身延山大学特任講師）は、敦煌及び中央アジア各地で発見された 157 点の法華経関係文献について概観し、散逸文献を中心としたこれまでの研究成果をまとめて、以下の 3 書、すなわち、利都法師訳『法華経義記』（中国文化遺産研究院蔵：xj232-碑帖 111.4, 武田科学振興財団杏雨書屋蔵：589 ノ五・六, 中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館蔵：傅図 28, P. 3308）、未知の六朝古逸『法華経疏』の同本離片（BD14693, P. 4567, BD01670, S. 2439）、紀国寺慧浄述『妙法蓮華経續述』とその関連文献（BD03215, S. 6494, S. 4107）について発表し、知られざる法華教学史の解明に繋がる新たな資料を提供した。

まとめ

本パネルでは、『法華経』の内陸アジアにおける展開について、さまざまな角度からの発表を行った。ただし、本パネルが意図しているものは法華経研究だけにとどまるものではない。『法華経』をモデル・ケースとして提示しているだけであり、同じ視点はその他の経論研究に対しても求められるものである。近年の内陸アジアの諸言語の文献調査により、インドの仏典がどのような形で中国にもたらされたのか、伝承の過程で仏典にどのような変化が生じているのか、また中国で受容された仏典がどのように内陸アジアで展開したのかということを再検証することが求められる。そのことを踏まえた上で、本パネルは、ミクロ的視点では個々の大乘經典研究に、またマクロ的視点では大乘經典の成立から伝播までの諸研究に対する新たな視座を提示した。